

# 三夫、その半生記

## 美水 正一

### (一) 誕生、小学校時代

この年、一月、日比谷公園で大隈重信公の国民葬が行われ、二月、エジプト王朝がイギリスからの独立宣言を行った。三月、全国水平社が創立され、日本で初めての人権宣言「水平社宣言」が宣言される。四月、スターリンがソ連邦ロシア共産党書記長に選出され、五月、アメリカではヤンキースタジアムが起工された。六月、日本が一九一八年から開始したシベリア出兵からの撤兵を声明、こうした時代背景のもと、大正十一年七月二十三日、三夫は、小作農家である美水（よしみず）家の男五人、女四人、九人兄弟の三男として発寒（はつさむ）にて生を受けた。発寒は現在、札幌市西区の一部として人口五万人を超え、JR函館本線と札幌市営地下鉄東西線が通過する閑静な住宅地となっているが、三夫の生まれた当時は農家がところどころ点在する小さな農村であった。

発寒の地名はここが桜鳥（サクラドリ）が群生する土地であったことからアイヌ語の「ハチャム・ペツ」桜鳥・川」に由来するといわれている。この地は明治四年に琴似発寒の名称が決定、明治九年に屯田兵が入り、琴似屯田兵村の分村として三十二戸が入植、その後在来武士、屯田兵の他、自発的に移り住んだ移民も混在し開拓が始まっている。三夫の生まれた大正十一年には発寒小学校が一学級、児童六十五名として開校している。発寒小学校は昭和十六年に発寒国民学校、昭和二十二年に学校教育法の施行に伴い発寒小学校となったが、三夫の幼少時は教室が二

つしかない、小さな木造校舎であった。

尋常小学校の時代、三夫は発寒川周辺でよく遊んだ。この川は札幌市と石狩市の境界を流れる、石狩川水系伏籠川（ふしかわ）支流の二級河川である。三夫ら子供たちは、冬は堤防の高低を利用してスキー遊びに熱中したものだ。スキーといっても靴を固定する金具が装備した板を使うわけでも、又、特別な靴を履くわけでもない。「つつかけ」と称する粗末なもので、板にサンダルのようなゴム、あるいは皮革製の輪がついていてそこにつま先を突っ込むだけのものである。あるいは竹スキーと称し、竹を割って足先に引っ掛けられるよう、熱を加えて板の先端を反らせただけのものである。

夏はウグイ、フナ、ヤツメウナギ、川蟹を採っては河原で焼いて食べたものである。三夫が泳ぎを覚えたのもこの川で、浮の代わりに木のハシと称する小さな丸太を使って泳ぎの練習をしていた。ある時、三夫の一つ上の兄、勝治がふざけて三夫の頭を押さえ、水中に沈め、溺れかけたこともあった。

三夫の家では米、麦、芋、大根、ネギ、ニンジン等の野菜栽培の他、馬一頭、犬、猫、豚などを飼っており、三夫はその世話係をやらされる。小学校に通う頃から畑作業の手伝いをさせられ、学校から帰ると「今日はニンジンの草取り何本」、というように割り当て仕事が課せられる。遊びたい盛り年頃、そそくさと草むしりを済ませ友達と遊んでいると母の怒鳴る声が聞こえて来る。雑草の除去を怠り粗末な仕事をする「や

り直し」あるいは、「夕食のお替り禁止」の罰が下される。

三夫が二年生と三年生の二年間、実家の発寒を離れ札幌の叔父さん宅へ養子として暮らしたことがある。三夫はこの養子先でも養父、養母の教えを守り、手伝いも十分に行っていたのだが、三年生の秋、養母にきつく折檻されたことがある。自分でも明確には認識しながら、気を張って過ごしてきた三夫は、これに嫌気がさしてしまった。家出である。夕方六時ころ家を出た。暗い道を子供の足でひたすら歩いた。耳の奥には養母の折檻の音が響いている。実家に着いたのは夜の十一時であった。母は何も言わず家に入れてくれた。養母に叱られたのも、結局のところ原因は三夫が悪さをしたためである。翌日、母にそのことをきつくたしなめられた。三夫がその後、まづまずの生活を営めたのも、母が小さいころから手厳しく養育してくれたからと、この七月で九十八歳を迎える今でもそう思っている。

三夫が五年生になった時、次女の姉が近藤家へ嫁いだ。それまで食事当番であった次女が抜けたことで、翌日から食事当番として兄の勝治と三夫が指名された。三夫はこの頃から煮物、焼き物、炊飯や代用食のすいとん、いも、団子などの調理をこなしたものだ。

高等小学校の卒業と同時に三夫は牛飼いの農家へ住み込み奉公に出された。三夫は小学校のころから将来は牧畜農業で身を立てようと決意していたので毎日の搾乳や畑仕事に精を出した。ところが、奉公二年目の冬のこと、右腕上部が「骨髓炎」に侵されたのである。この病気は骨髓に細菌感染が生じることで発症する。三夫は骨の一部の激しい痛み、発熱に悩まされた。大手術が行われ、炎症が生じている骨の一部が開かれ腫瘍を切開し腫瘍を体外に誘導・排出するドレーナージが施された。結局、その後半年は仕事に復帰できず、奉公先からこれでは農作業は無理であ

ろうと、と引導を渡された形となった。

## (二) 就職・札幌での仕事開始

昭和十三年、三夫が十六歳の年に煎餅布団一組と柳行李一つを携え、札幌のタイヤ修理工場「ブラザータイヤ商会」に奉公に上がった。身分は工員見習いである。持参した柳行李には肌着他衣類、小物が詰まっていた。この会社には兄弟子四人が住み込みで働いており、三夫は五人目の工員として住み込み奉公となった。高崎一夫さんは二年先輩、大村泰蔵さんは同じ年ながら、就業年度は一年先輩にあたる。この他、北川さん、佐瀬さんが居た。この五人がブラザータイヤ商会の自宅の離れ、十二畳間で一緒に暮らした。

朝六時に起きると洗顔する間もないまま工場へ直行する。朝食前のひと仕事をこなし、八時に朝食である。発寒の実家では一汁、一菜という質素な食事だったので、栄養面も考慮された質量とも申し分のないこの食事だけは、三夫にとってはありがたいものであった。手早く食事を掻っ込むと、夕食後も仕事である。三夫には、当時、そもそも労働基準法が存在していたのか、あったとしてもそこでのような規定がなされていたのか、知らぬまま夜も八時、九時まで労働は続くのである。

それでも三夫にとってこの労働はさほど苦にならなかった。農家に生まれ、育ち、働くことには慣れていた。仕事がつらいという理由で実家に戻りたい、と思ったことは無かった。三夫が陰ひなたなく小まめに働くので兄弟子にも可愛がられた。三夫が誰に言われるのでもなく自発的に玄関の靴や下駄を揃えていることが社長の奥様に認められ、ずいぶんと褒められたものである。もっとも、それ以降玄関の片づけが図らずも

三夫のルーチンの一つに加わってしまふ事になった。

とはいえ、この生活は長くは続かなかった。昭和十二年七月七日に始まった日中戦争によりこの頃から生ゴムを使う仕事には制約が出てきた。タイヤやチューブの修理には生ゴムを使用する。修理箇所を削って表面を滑らかにしてから生ゴムを加熱して貼り付ける。生ゴムは日本では取れない貴重な輸入品である。昭和十二年十二月に商工省は生ゴムの全面統制を実施し配給制とした。昭和十三年、ゴム工業は全面的に配給統制に置かれることになり、北海道内に二十九か所あった生ゴム関連工場が統制後八工場まで減らされる事態となった。この頃の生ゴムの需要は軍用靴や合羽など戦争関連のものが多かったことが統制の背景にある。

こうして生ゴム製品は軍の管理する物品の一つとなり、規模の小さな企業では原料確保が難しいとして、雑多な零細企業は企業合同され、会社組織に改組された。これに伴い、零細企業に多い住み込み奉公方式の労働形態に規制が加わり三夫の勤めるブラザー商会もこの方式を廃止した。こうして三夫は、一年先輩の大村君と近所の六畳間に引っ越すこととなった。奉公先から私生活が解放された。大村君との共同生活には若い者同士の二人暮らし、楽しい面もあった。大村君は魚の町余市の出身で、実家からは時々海産物の差し入れがあった。一方、三夫の実家は農家なので米と野菜にはさほど不自由せず調理の手間を除けばそれなりの食事を楽しめた。

### (三) 海兵団入団、そして軍隊時代

三夫は昭和十八年一月十日、二十一歳の年に海軍横須賀海兵団に徴兵

入隊となった。この日に合わせ、二日前に「祝入営」の幟を先頭に親類縁者に見送られ琴似駅を出立した。三夫の他、もう一人地元から海軍に入隊することになった羽田君と二人で横須賀に向かった。横須賀着任の前日は江の島の旅館に一泊、朝起きたら眼前に富士山が大きく展開しており、とうとう「内地」に来たのだ、との思いで感激したものである。

徴兵検査で即入営となる可能性の高い者の判定区分を「甲種」という。甲種合格の目安は身長百五十二センチ（五尺三寸）以上・身体頑健の者であった。それでも、当初、明治時代では合格率がかなり低く、十人に一人か二人が甲種とされる程度であった。そんなこともあり、身長が五尺一寸と小柄だった三夫は徴兵検査に合格するとは思っていなかった。ところが、太平洋戦争末期では兵員不足になり、基準を五センチ下げた。ただし、身長が極度に高いなど体格が標準でない場合は、軍服の支給に支障があるため乙種、もしくは丙種であった。

検査官から発せられた言葉は「美水三夫、第一乙種、但し甲種へ編入、一月十日横須賀第二海兵団に入隊すべし」というものがあった。その日は、お先真つ暗との思いで帰宅したのである。三夫としては陸軍であれば、青年学校で小銃を担がされ毎日訓練していたので多少の自信もあったが、海軍とは！しかも海軍は地元の琴似からは二人だけの入隊で、当時の同級生全員が陸軍への配属である。こうした事実が三夫の気持ちを暗いものにした。しかし、その後、陸軍配属となったこの当時の仲間たちは全員沖縄で戦死を遂げることになるのである。

海兵団とは、大日本帝国海軍で軍港の警備防衛、下士官、新兵の補充員の艦船部隊への補充を行い、かつ教育訓練を行う組織である。海兵団は三夫の入団した横須賀の他、呉、佐世保、舞鶴、大湊、大阪にあり、韓国、台湾にも存在した。教育・訓練を目的とした組織のため、練習部

が設けられ、海軍四等兵たる新兵、海軍特修兵たるべき下士官などに教育を施すために、鎮守府、警備府に設置されていた陸上部隊である。

一般的に、志願兵、徴兵として海軍兵に採用された新兵は、海兵団に入団すると、数ヶ月間基礎教育を受ける。ここで受ける教育は軍隊教育の基礎であり、海軍兵として進むべき基礎なので、海軍の一般教育と同じく精神教育、技術教育、体育の授業が課せられる。精神教育は軍人精神の何たるかを教え込むことにあり、技術教育は将来、海上勤務に必要な一般知識を習得させるほか、兵種によつては必要な技能、概念を教える。体育は武技、体技に区別し、厳格な訓練を実施する。

三夫が入団した横須賀海兵団は横須賀市楠ヶ浦(くすがうら)にあった。この施設は、最初は神奈川県三浦郡横須賀町逸見(へみ)に設置されたが、大正六年に楠ヶ浦に移転したものである。昭和十八年当時の横須賀は四月に浦賀町、逗子町、大楠町(おおくすまち)、長井町、北下浦村、武山村(たけやまむら)を合併し、三十五万八千五百四十七人の人口を誇る街に成長していた。同時代の札幌は道内最大の町とは言え、まだ人口二十二万六千六百九十五人の田舎町であった。三夫にとつて横須賀は大都会に感じられた。三夫は三カ月の海兵団生活を経て、同年四月に海兵団を卒業した。訓練は過酷であった。とりわけカッターの訓練が厳しかった。カッターとはオールを使って漕ぐ訓練用のボートである。海軍ではこの訓練が責任感と忍耐力、全員一丸となって艇を進める協調性の醸成に最適として盛んに実施された。手のひらにまめができ、さらにその上にまめがでできる、尻はオールを漕ぐことで擦れて血だらけとなった。訓練終了後、新米水兵はお互いの尻に赤チンを塗りあうことで連帯感を高めたものである。この訓練ではオールの捌きが悪いと何度も頭を殴られた。痛みと屈辱、これに耐えるのが新米団員として何よりも肝要なこ

とであった。船の中では下つ端の一等兵たちが上官に每晚呼び出され「精神棒」と書かれた木の棒で何度も尻を打たれるのだ。每晚これをやられ痛みとはれが引かず仰向けになつて寝られるものは居なかった。

海兵団では月に二回休みがある。休日は新しいジョンベラの付いた海軍の水兵服に身を包み靴もピカピカに磨いて横須賀の町を闊歩した。ジョンベラとは本来は水兵のセーラー服の襟のことだが、「ジョンベラ」だけで水兵服そのものをも意味した。こうした休日の散歩は前日にカッターの訓練で頭を殴られた痛みや屈辱感を忘れさせる一瞬であった。休日の街歩き、横須賀駅から中里神社、上町(うわまち)のにぎやかな街並みを散策し深田神明社(ふかだしんめいしや)、龍本寺(お穴さま)、砲台山、田戸(たど)の赤門、おりようさん終焉の地、若松商店街、諏訪神社、心が解放されるこの街歩きは何よりも楽しかった。

三夫の生まれ育った札幌は一八六九年(明治二年)開拓使が置かれた時から昭和十八年までせいぜい七十数年の歴史しか持たない町であった。古い建造物といつてもせいぜいその程度である。横須賀を含む本州ではそこそこで歴史を感じさせる建造物に出会えることも新鮮な思いであった。又、こうした市中散歩の折、三夫はそもそも童顔だったので徴兵には見られず、しばしば志願兵扱いされたこともあった。年端もゆかぬのに、お国のために志願した少年兵、という見方をされ、それなりに、いい思いをさせられたものである。戦前の日本の徴兵制では、男子二十歳になれば徴兵検査を受けねばならず、徴兵検査の結果、甲、乙、丙、丁、戊の5段階に分けられ、甲と乙は合格とされた。戦況とともにそれが丙にまで合格適用され、必要に応じていわゆる「赤紙」が来て召集となった。これは陸軍に限つてのことで、海軍は志願兵が主流のため、召集は限定的であった。その後、一九四一年に太平洋戦争が起こると、年を追

つて戦況は厳しくなり、それまで二十歳であった、兵役義務年齢も一九四三年には十九歳以上、一九四四年には十七歳以上、更にその後は十四歳以上にまで引き下げられ、男子十四歳になれば十七歳の徴兵年齢を待たずとも、学校や周りの者たちが「志願」することを半ば強制したり、勧めたりして、実質戦争に参加せざるを得ない仕組みを作り上げた。世に言う「十五歳の志願兵」というものも存在したのである。とまれ、三夫が徴兵されたのは二十歳になってからのことであった。

昭和十八年四月、三夫は海兵団を卒業後、青森の大湊より第二新興丸に乗船、水兵としての生活が始まる。大湊は昭和十七年、アメリカ軍の注意をミッドウェイ島からそらすためのアリューシャン攻撃部隊（空母機動部隊）が大湊から出撃し、ダッチーハーバーを空襲している。このミッドウェイ作戦の起点となった港である。

乗船後一カ月は船酔に悩まされたが徐々に慣れた。昭和十七年の秋月に占守島（しむしゅとう）片岡湾に千島方面特別根拠地隊として北千島防衛本部が設立された。占守島は千島列島北東端、オホーツク海と太平洋に囲まれ、北緯五十度四十四分、東経百五十六度十九分に位置する面積三八八平方キロメートルの小さな島である。東西から北東へ約二十km、幅は最大で二十kmの楕円形の島である。一九一〇年当時この島に小規模ながらカニ缶詰工場が存在していた。この工場は一九一四年に本格操業を開始している。第二次世界大戦前の最大人口として夏季に千名を数えたことのあるこの島は、現在はロシア連邦が実効支配する地域となっているが、二〇一三年現在、ロシア人の民間人は居住しておらず灯台守とその家族、総勢四人だけが定住しているようである。この島に上陸するにはロシア連邦軍の許可が必要で、ペトルパブロフスク・カムチャツキーからヘリコプターで約二時間を要する。ロシア人の定住者が皆無

であった昭和十八年のその頃、三夫を乗せた第二新興丸が片岡湾に接岸、三夫も上陸し防衛本部勤務となった。

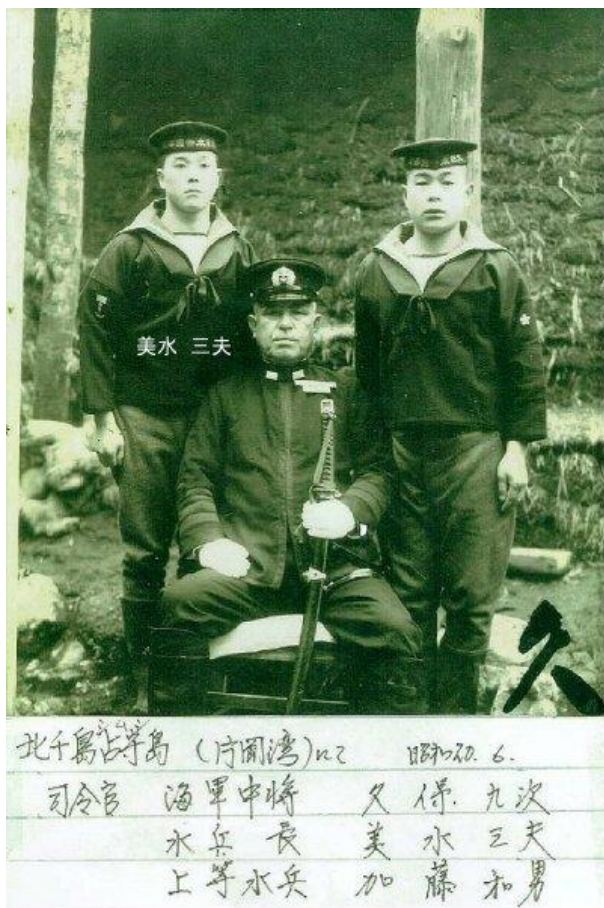
第二新興丸は日本海軍が第二次世界大戦中に運用した特設砲艦兼敷設艦である。特設砲艦は二千〜三千トンの貨客船または貨物船で、哨戒の他、必要に応じ機雷敷設、水路嚮導、交通、運輸を行うのを任務とした。又、敷設艦とは機雷を敷設するための軍艦である。第二新興丸はこの大きな二つの任務を担っていた。この船は横須賀市浦賀地区にあった浦賀船渠（うらがせんきよ）通称、浦賀ドック）の造船所で建造され、昭和十三年（一九三八年）十一月二十九日に進水、昭和十四年（一九三九年）三月七日に竣工した。船型は、船体中央に機関部と船橋配置、その前後に二つずつの倉口（貨物倉やその他の区画への貨物の荷役や物資の出入れ、あるいは人の出入りのために甲板に設けられる開口）と短脚型のマストを一本ずつ配置したシンブルな構造となっている。この第二号新興丸はその後昭和二十年八月二十二日にソ連海軍の攻撃で損傷、多くの死傷者を出した。これは日本から見ると、大戦終結後、樺太からの引揚民間人を輸送中の出来事であり、大変遺憾な出来事であるが、そもそも敗戦（終戦）日を八月十五日としているのは日本だけで、米、英、仏、加、露諸国では対日戦勝記念日は九月二日とされている。

船の中では下っ端の一等兵たちが上官に毎晩呼び出され「精神棒」と書かれた木の棒で何度も尻を打たれたものである。毎晩これをやられ痛みとはれが引かず仰向けになって寝られるものは居なかった。

三夫の仕事は、海軍中尉久保久次司令官就きの従兵である。従兵は上官の身の回りの世話、オスタップ（バケツ）を使った洗濯、アイロンがけ、食事の支度と多岐にわたる。オスタップは亜鉛製の水桶で洗濯、洗顔時の必需品であった。実際の料理は民間のコックさんが担当するが、

従兵は食材の準備や試食係を担う。一般の兵士たちが過酷な船上生活を送る中、幸いなことに三夫にはこの種の経験が無かった。又、三夫は一般兵のように兵舎で食事したことは無い。プロのコックが調理したおいしい食事をいただけることは従兵だけに与えられたいわば特権であった。同僚兵に申し訳ないという思いもありながら、享受できる特権は、やはりありがたかった。

昭和二十年六月、占守島の防衛は陸軍が担うこととなった。終戦の約二カ月前のことである。こうして昭和二十年六月、三夫の所属する部隊は青森の下北半島の防衛に就くこととなり占守島を離れた。島を去る直前に片岡湾で撮影した写真が今でも残っている。司令官、軍刀を左手に持つ海軍中将久保久次を中央に右に美水三夫水兵長、左に上等水兵加藤和男が口元をきつく引き締めた表情で撮影されている。



この時、海軍の部隊は六杯の船で占守島から引き揚げている。船の数を数えるのに現在では「杯・盃」はあまり一般的とは言えぬが、当時は軍艦などを数える際のいわゆる「業界用語」として一般的に使われていた。敵潜水艦の攻撃を避けるため夜間、遠回りして出港、速度の一番遅い船に合わせたの航海である。青森に着くのに八日を要した。しかし、無事に着いたのは二杯のみであった。この船は六月七日下北半島大畑に接岸した。他の四杯は全て敵潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没してしまった。

しかし、三夫の場合は、幸いにも船での引揚ではなく航空機によるものであった。久保司令官、砲術参謀、機関参謀、通信参謀、先任参謀（主席参謀）、これに従兵である三夫を加えた六名は戦勝時にアメリカから奪取したダグラス社の旅客機（二十人乗り）が内地から飛来、昭和二十年六月十日午前八時占守島を離陸、同日午後一時千歳空港に着陸した。

三夫らが離れた占守島には、その後、八月十八日未明ソ連軍の上陸が開始された。これは、ポツダム宣言受諾に伴う日本軍の武装解除後のことではあったが、日本軍守備隊第九十一師団を中心に急遽解除を取りやめ戦闘状態に入った。この戦闘により一時はソ連軍を上陸地点の武田浜まで追い落としたが、八月二十一日に日本軍第九十一師団長が降伏を定めた文書に署名し、完全に停戦が成立した。これにて二十四日まで占守島の日本軍は武装解除された。ソ連側の資料では日本側死者一〇一八名、ソ連側約一五六七名としてソ連側死者が日本側のそれを上回ったと記録されている。日本側の資料では日本側約三百人、ソ連側三千人とある。一旦は武装解除したにもかかわらずソ連側にこれだけの打撃を与えられた原因は、北方方面は対米戦を予想してソ連側の予想を超えて兵力を固めていたこと、満州から転進した精銳の戦車第十一連隊が機能したこと、それまでほとんど戦闘がなく食糧、弾丸の備蓄が豊富であっ

たことなどが要因と言われている。

三夫を含む司令官一行は帰途、千歳空港の海軍基地で二泊することになった。この時司令官が三夫は札幌の出身なので、実家に帰ってよいと、二日間の外出許可を出してくれた。司令官と部隊長から酒を各一升頂き、それを土産に三年ぶりに帰郷することとなった。実家は田植えの忙しい最中であつたが皆仕事をとりやめ、近所の人々も呼んで大宴会となった。翌日夕方司令官と合流、更にその翌日青森の大湊に到着した。更にその三日後、久保司令官が四国の司令官にという、転勤命令が届いた。

司令官から三夫に二三日東京の実家に寄るので同行しないかとのお誘いがあつた。三夫は快諾し、お供することになった。これは司令官とて私用の旅行なので飛行機は使えない。青森から列車の旅である。途中、大きな町は米軍の空襲を浴び焼け野原であつた。焼け残つたポストだけが妙に生々しい存在感を発して佇む姿が、なぜか印象深く思い出される。口にごそせぬが、これでは日本もいよいよダメだな、もはやこれまでか……と強く思つた次第である。

昭和二十年六月末の東京は一面焼け野原であつたが、司令官の実家のある田園調布は空襲を免れ全てそのままであつた。奥様の手料理で久方ぶりに家庭の味を満喫させていただき、一泊。翌日は軽井沢の別荘に行くが着いて来ぬかとお誘いで、三夫も司令官、奥様にお供した。軽井沢でも一泊させていただいた。翌日、司令官とは軽井沢の駅でのお別れとなつた。こうして、三夫が青森の本隊に戻ると次の司令官である服部少将が待つていた。

服部司令官の従兵として二カ月経過した昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音放送が日本中に流れ、終戦である。やっと平和が訪れた。三夫は、司令官の荷物を四個作り、司令官の実家へ配送する作業を終え、

自分の荷物も二個札幌に送つた。支給された退職金三百円を手で明日にでも帰郷しようと考えていたところ、小樽出身の高橋少尉から終戦処理を手伝うように、との依頼を受け、受諾した。この時の終戦処理とは、日本兵の人数、小銃、機関銃、手榴弾の個数をまとめ一覧表を作成する業務である。この作業をこなすのに十月中旬まで日数を要した。書類を作成、アメリカの兵隊にこれを渡して終了である。この仕事の対価として九百円頂戴した。海軍の退職金三百円と合わせ合計千二百円である。当時としては小さな家なら二軒は建てられる金額であつた。当面使う見込みがないと考え貯金しておいたところに、昭和二十一年二月十六日幣原内閣が突如発表した金融緊急措置令が三夫も含む一般市民を襲つた。いわゆる新円切替である。第二次世界大戦後は、生産設備の壊滅、賠償引当、経済統制の弛緩、不作、占領経費の円建て支払いなどが原因となりインフレが進行し、新円切り替えに至つた。旧円、新円の交換レートは一對一であつたが、新円の引き出し制限により国民が戦前から所持していた現金資産は事実上ほぼ使えなくなつてしまつた。

一方、占領軍軍人は所有する旧円を無制限に新円に交換することが出来た。闇で日本人から旧円を割引相場で買い取り新円に切り替えることで利ザヤを稼ぐ者、旧円を集め、こうした悪徳米兵に売りつなぐことで利益を上げる者も現れた。又、新円の発行そのものが間に合わないため、回収した旧円に証紙を貼つて新円として流通させたが、この証紙そのものが闇市で売買された。こうした証紙の売買で荒稼ぎする輩も横行したのである。いずれにしても首都圏から遠く離れた札幌で日々の生活にあくせくせざるを得ない三夫にとっては無縁な世界であつた。こうして、三夫の将来の人生設計のよりどころとなつていた海軍の退職金と戦後処理の手伝いで手に入れた新築の小さな家二軒分の現金資産が、通勤用の

自転車一台分の購入資金にまで下落してしまったのである。後日落ち着いて考えるに、あの時、現金を不動産か貴金属にでも交換しておけば良かったのであろうが、日々の生活に追われる三夫にとって、そんな心の余裕は無かった、というのが実情であつた。

#### (四) タイヤ修理業への復職

軍艦での生活が一年、北千島占守島での防衛任務が二年の海軍時代を経て、敗戦という形で終戦を迎え、三夫は自宅に帰ってブラザータイヤに復職した。ほどなくして東京の司令官からお手紙が届いた。何事かと開封してみると「仕事はあるか、生活に困っていないか。仕事がないなら上京しないか？」との内容である。一兵士の三夫のその後を気遣う司令官のお手紙に三夫は感激で涙した。幸いにも三夫にはタイヤ再生技術があつたのでこれを生かして地元札幌で生活して行く、との決意を司令官に伝えた。

昭和十三年、三夫が最初にブラザー商会に就職した年、日本全国の自動車保有台数は二二万千六百二十台であつた。昭和十年に十七万六千二百五十二台を記録した保有台数は、昭和十一年には十九万五千二百三十六台と伸び、昭和十二年には二十一万六千七百四十六台と遂に、二十万台を突破していた。しかし、当然のことながら、昭和十六年十二月の太平洋戦争以降この台数は減り、玉音放送が流れ天皇の終戦の詔が流れた昭和二十年では十四万四千三百五十一台、翌二十一年は更に減少し十九万五千八百八十六台と昭和五年当時の保有数にまで減少していた。

#### (五) 昭和二十三年

昭和二十三年五月二十七日、美水家に待望の第一子が誕生した。長女真弓である。

この年は一月に関西汽船「女王丸」が瀬戸内海で機雷に接触して撃沈し、死者百八十三人という痛ましい事故が起きている。戦争の負の遺産はまだ続いていた。他にも死者三千八百九十五人を出した福井地震、産院で百人以上の乳児が殺害される寿産院事件、行員十二人が毒殺される帝銀事件が起き、太宰治が玉川上水で心中入水死した年である。

一方、国内の自動車産業は昭和二十二年を境に大きく改善した。二十一年の十万九千五百八十六台に対し二十二年は十八万四千八百五十六台と前年比ほぼ百六十九%の伸びを記録した。翌二十三年は二十三万三千百十三台と前年比百二十六%の伸びとなった。絶対的な台数でみれば無論、ピークである平成十九年の約八千万台と比較できる数字ではないが、戦前の最大値であつた昭和十三年の二十二万千百十二台を十年ぶりに超えた年であつた。

#### (六) 昭和二十五年

昭和二十五年、朝鮮戦争が勃発し、レッドパーズが荒れ狂う年である。吉田茂が首相として内閣を率いていた。この年の二月十八日、戦後初の雪まつりが札幌市で開催された。中心となった会場は大通り公園西七丁目広場である。昼は素人のど自慢、雪中体操、ドックレース、夜は、かがり火とイルミネーションが輝く会場でスキー仮装行列が催された。地



元の中高生が製作したビーナス像やひぐまの雪像が市民の眼を楽しませた。現在、訪問者が二百六十万人という一大イベント化した札幌雪まつりはこうして、この年にスタートした。

かくして、二月二十五日、美水家に待ちに待った男の子が誕生した。この札幌は前日の最低気温が零下十・八度を記録する寒さであったが翌日は最高気温プラス八・一度、最低気温も零下一・五度に回復し厳しい寒さが幾分和らいた日であった。札幌市北十四条東一丁目、創成川と石狩街道に挟まれた四軒長屋の二軒目、三夫にとって二子目の長男が誕生したのである。ここは二十二年に和子（よりこ）と所帯を持った時に借用した家である。第一子の長女真弓の誕生後一年と九カ月で長男の誕生である。

右隣は小野寺さん宅。ここは馬を一頭飼い、馬車を使って零細規模の運輸業を営んでいた。左隣は田村さん。眼鏡をかけて痩せた人当たりの柔らかいご主人が奥様と紳士服の縫製を営んでいた。間口二畳半の八畳の奥の間で、妻、和子の養母である山木のおばあちゃんと近所の産婆さんに無事取り上げてもらったのが長男、正一である。誕生日が二十五年、二月二十五日と語呂が良く覚えやすいので大いに満足であった。早速本屋から名前の付け方の本を購入し、あれこれ思いめぐらせる。三夫は自分自身の名が三番目の男の子Ⅱ三夫、とあまりにも安易に名付けられたと思い、息子の名づけには大いに思い悩んだ。タカシ「隆、貴」とか「人」の字が入った名、有人「ユウト」、和人「カズト」等が候補に挙がったが、決めきれない。妻和子の養父、義理の父である山木の傳次郎おじいちゃんに相談したところ養父が言うには「これからは普通選挙の世の中。覚えてもらいやすい、やさしい名前が良い」とのアドバイス。丁度その頃、小樽出身の議員で寿原正一（すはらしょういち）という代議士がおり、

連日地元新聞をにぎわしていた。山木のじいちゃんの、「ともかく覚えやすい名前」という言葉を反芻しひらめいたのが「正一」であった。正しく真つすぐに一生を生き抜いて欲しいとの願いを込めてこの名前にあやかった。寿原正一氏は、札幌、小樽、江別、千歳、恵庭から石狩支庁、後志（しりべし）支庁を含む北海道第一区選出の衆議院議員として自由民主党から立候補し一九六〇年十一月二十日 第二十九回衆議院議員総選挙、一九六三年十一月二十一日 第三十回衆議院議員総選挙で当選を果たしている。

奮発して新品の自転車も購入した。正一が少し成長し、首が座るのを待ち、三夫は毎日のように正一を自転車に乗せ近所を走り回った。正一は好奇心が旺盛で通り過ぎる風景を飽かず眺め「あれは何？これは何？何故？どうして？」とあれこれ質問攻めにあつたことが思い出される。

今思っても冷や汗が出るのはよちよち歩きの正一が創成川に落ちたことである。創成川は札幌市の中心を流れる川で市を東西に分ける起点ともなっている人工河川である。戦後の復興の中、創成川沿いの北八条付近はいち早くにぎわいを見せるようになり、交番や郵便局、製麻会社などが立ち並んでいた。川の両岸には八条市場他、商店街も形成され、そこに集まる人々で、周辺はいつも混雑していた。ここほどの規模ではなかったものの、三夫の住む北十四条から一区画南側の北十三条にも、創成川を渡って石狩街道方向に市場が形成されていた。創成川は、かつては水量の多い清流として知られており、一九六〇年代までは創成川中流から上流（鴨々川）の周辺に、呉服屋や染物屋が数多く軒を連ね、染物屋が市松模様染められた色とりどりの友禅を竹竿に引っかけ、川で水洗いしている光景が、日常的に見られたというが、三夫の住む北十四条は中・下流にあたり、この地域まで下ると近隣の工場や住民の様々な生活

用水が排出され、文字通りどぶ川の様相を呈していた。

当時は土手が、単に雑草が生えているだけの坂になっており、フェンスもなければガードもない全くの未整備であった。毎年必ず何名かの転落事故が起きていた。その川に正一が、落ちた。幸いにも一丁流されただけで、北十五条橋そばの真鍋燃料店の隣家のおじさんに救い上げられた。このおじさんは丁度、川に降りて洗い物をしていた。こうして正一は九死に一生を得たわけだが、拾い上げられたその日の夜に発熱し、激しい下痢の症状を見せ始めた。急遽、家から西へ五丁先の北大病院に入院し、赤痢の疑いが出たので保健所から白衣の係員がやってきて家の周りに消毒薬を散布した。特に念入りに散布したのは正一の便で汚染された可能性のあるトイレ付近であるが、家の内外にこれでもかという様相で白い粉を散布したようである。姉の真弓も翌日入院させられ十日ほどの病院暮らしを強いられた。

### (七) 脱サラ、そして独立

昭和二十九年、三夫はブラザータイヤ商会から独立して自力で商売を開始した。この年は我が国の自動車保有台数も百万台を突破し今後の更なる普及が期待されていた。

独立の意思を司令官にご報告したところ、「昔の部下が千歳の自衛隊の部隊長として活躍している。自衛隊の仕事をしたくないか」と紹介状をしたため、送っていた。久保司令官とは司令官がお亡くなりになるまで毎年、北海道の海産物を送り交際を続けさせていた。久保司令官は特に「秋あじ」がお気に入りです。毎年、大変喜んでいただいた。

タイヤ修理業務を本職として励んだことの他、昔の仲間と株主三名で会社を作り小さな不動産業を始めた。アパートを貸したり、貸し事務所を手を染めるなど小規模ながら不動産事業も手掛け、札幌市内に三か所の宅地を買い、すっかり札幌の住人となり、経済的にもまずまず安定したものとなってきた。

三夫の二年先輩の大村泰蔵氏も三夫の独立時の大恩人である。独立するためには自宅を改造し、ボイラー、タイヤ焼付け機（モールド、モーター、コンプレッサー等）揃える必要があった。これには当時の金で六十万円必要であった。その時代の物価としては、たばこ（ゴールデンバット）三十円、新聞購読料月三百三十円、はがき五円、かけそば二十五〜三十円、ビール 百二十五円、米十キロ 七百六十五円という水準であり、三夫がブラザータイヤから貰っていた給料は月一万円である。既に子供が二人いて、ぎりぎりの生活であった。社長は三夫が兵隊から帰り従業員も揃い、タイヤ再生業が時代の波に乗り笑いが止まらないほど儲かっていた。しかし、三夫ら従業員の給与は一向に上がらない。先輩達は、ある者は会社の資材、機材を利用して内職に励み、ある者は、修理代金のピンハネを行うなど生活の防衛に走った。一方、社長は近所のくだらない取り巻き連中を連れて毎日のようにキャバレー通い。三夫はこの社長の下でいつまで勤めていても芽が出ないと思い、知人の鉄工場に簡易型の焼き付け機の製作を特別注文し、自宅に据えた。この装置がゴム靴、合羽の修理、自転車やリヤカーのタイヤ修理に役立った。物のない時代である。なんでも修理して同じものを長く使う時代であったので、通勤から帰宅後、あるいは休日を利用しての年間仕事はそれなりの収入となった。

三夫の借家も雨漏りがひどい。まずは自力でと、屋根の修理を行った。

十三条の成田柁屋(まさや)で材料のみ調達し、葺き替え工事は自力で行ったものである。

この内職で三年かけて十万円貯めた。この話を実家のお祭りに来ていた母方の従兄である大畑外吉さんに酒を飲み交わしながら聞いてもらった。大畑さんは三夫の結婚の仲人になってくれた人物である。「そうか。お前がそこまでやる気があるなら、今、弟を分家させるための資金を郵便局に預けている。その中から三十万貸してやる。但し、郵便局に預けるのと同率の利息を付けることが条件」と言ってくれた。一方、先輩の大村泰蔵さんは証文無しに口約束で二十万円用意してくれた。この五十万に三夫が爪に火をともし思いで貯蓄した十万円を加え、計六十万で「北光タイヤ工業所」が発足した。

## Ⅳ 昭和三十年

五月に国鉄宇高連絡船「紫雲丸」衝突沈没事件、この事故で修学旅行の小学生など百六十八人の犠牲者を出した。八月には森永ヒ素ミルク事件で百三十三人の死者が出ている。年の後半からは神武景気が始まり洗濯機やテレビが急速に普及する時代となった。

自動車関連では、この年にトヨペットクラウンが登場、我が国の自動車保有台数は、前年の昭和二十九年に百万台を突破、三十年には約百三十四万台を記録するまでとなっていた。百万台超えは日本のモーターゼーション市場初の快挙であった。やがて三十三年には二百万台、三十六年には三百四十万台へと向かうのである。これに伴い、「北光タイヤ」での自動車タイヤの販売、修理も盛んに行われた。とりわけ北海道の場合、

冬場のタイヤ交換が必要なため春と秋の二シーズンは、このタイヤの「履き替え需要」で忙しかった。

電気釜が登場、ボデービル、ポロシャツが流行し、太陽族、ノイローゼがこの年の流行語となる。

得意先も近隣の個人客の他、やまとハイヤー、札幌ハイヤー、中央バス、札幌トラック、トヨタ自動車、日通等、逐次大口の需要家を開拓した。警察署、札幌北署も顧客の一つであった。縁戚の近藤信ちゃんの協力も得て二人で頑張り二年で五十万円の借金と利息、これに感謝のしるしに酒を二升ずつ付け無事完済した。三夫はほっとして嬉しい思いをしたものだ。昭和三十年六月に生まれた真理子を含み、子供が三人、従業員も高橋さん、佐藤君、及川君、福永君など増えてきて北光タイヤの全盛期を迎えた。

この年七月二十三日、三夫は三十四歳を迎える。

